批評

「新たな歴史小説」への挑戦

——宮本輝著『潮音』の二重構成について

山内昌之

『潮音』は、長編大河小説である。さながら上田敏の訳詩集『海潮音』を思わせるタイトルにまず魅かれた。しかし、題名は小説の最末尾で、富山湾の水底から主人公の妻が聞いた巨大な腕の動きを摸したものだ。「ねっ。聞こえるでしょう？ 潮のすさまじい音が。すさまじいけど、静かですね。恐ろしいほど静かで、世界の海の底が動いていますよ」。

作品の第一巻が出された時、私は『週刊文春』の書評でこの労作を、「日本各地を回った富山の葉売りの鋭い観察眼と時代認識を通して、黒船来航から王政復古を経て西南戦争にいたる平和と変革の時代を描く雄渾な文学作品」と性格づけた(2025年2月27日号)。この印象はいまでも変わらない。全四巻が完結した現在、改めて感じたのは、『潮音』の重層化されたストーリーの面白さだけでなく、宮本輝氏が「歴史小説」として工夫した構成の妙である。

この作品では、二つの並行する大きなストーリーが時には別々に展開され、時には交差し、そして合流しながら進行す

る。二つの流れは時々の大きな史実と、実在した歴史的人物や虚構に近い作中人物の動きを交差させながら、大きな事件のうねりを作り出す。そこで、小説的虚構と歴史的史実が巧みに接近させられ融合もしながら、文学として史実をのりこえる作品の一体性が工夫されたのである。

二つの流れとは何か。それに触れるためには、まず、時代小説と歴史小説との決定的違いを強調した宮本氏の文学論を紹介しなくてはならない。氏のまとめによれば、時代小説では架空の人物が動くのに対して、歴史小説においては歴史上に登場した実在の人物が主人公になる。氏は、実在の人物が生まれてから死ぬまでいろいろな出来事が起きたにもかかわらず、一般的に作家はその人物の個性や趣味や嗜好をまったく理解できないと考える。そうした作家が歴史を描くとストーリーは「ぜんぶ嘘」になると強く信じていたらしい。つまり、氏にとって歴史小説を書くには大きなハードルがあったのである(『文學界』2025年4月号)。

歴史小説執筆への禁欲を自分に課していた宮本氏が「潮音」を書けると確信したのは、私の見るところ、同じ小説の

なかに、文学的な質と様式の違う二つの流れを無理なく組み立てる構想を思いついた瞬間ではないだろうか。第一の流れは、事実を踏まえながらも、創作の広がりによって想像もほぼ無制限に許される主人公・弥一はじめ富山の葉売りの活躍や、弥一の家族愛とリーダーシップの動きである。そこでは、弥一と妻お登勢との愛や朋輩との信義あふれる交遊を描くなかで、作家としての創作意欲に驥足を存分に展ばせると確信したといえよう。この意味では、弥一は普通の文学や歴史でいう「英雄」ではない。しかし、トルストイが「戦争と平和」の付録(文学論)で批判的に用いた表現を借りるなら、歴史家が重視するような、「人物がなんらかのある目的のためにした貢献」という意味では、弥一以上に存在感のある「英雄」めいた人物は、『潮音』には登場しないのではないか。

トルストイには、芸術家(作家)にとって、生活のすべての面にかかわるような意味での「英雄」は存在するはずがないという信念があった。存在すべきはただ「人間」だけなのである。宮本氏も主人公の弥一を葉売りと家族らの生活のすべての面にかかわる「人間」として描こうとしたが、そこにはなにかがしかの「英雄」の輪郭も残された。というのは、本来なら「英雄」として描かれるべき「さいだいしよ」(西大小)のような存在が直接に言葉が発する存在感の大きさをなく、わざわざ弥一の目を通して曖昧かつ卑小に描かれがちだからである。本来の「英雄」たる西郷吉之助・大久保

一蔵・小松帯刀の細部は決して描かれない。ここに作中で宮本氏が工夫したもう一つの流れがからんでくる。

第二の流れは、幕末の薩摩藩を中心に描かれる倒幕運動など江戸政治史の最終局面にほかならない。そして、彼らと不即不離の関係を維持する弥一ら富山の葉種問屋が観察する眼を失わずに、弥一が語り手となって幕末史や倒幕運動に関わる宮本氏の史観が縦横無尽に披露される。そこには、「せごどん」や「いちぞどん」と薩摩藩士が呼ぶ人物が西郷吉之助や大久保一蔵という実名で頻りに登場する。しかし、彼らは歴史に実在した人物でありながら、(あるいは実在したが故に)他人と雄弁に話すこともない。また、たくましく行動することもないのである。ここでは西郷や大久保や小松は、作者の頭で考えたセリフを語ることもなく、トルストイが試みたように史料を博搜して発言が再現されるわけでもない。従って、『潮音』は、厳密にいえば、宮本氏がかつてイメージしていた「歴史小説」のジャンルにも収まらない性格も帯びている。

この特性を説明するには、富山藩もしくは富山の葉種問屋と薩摩藩や同藩御製葉掛との間に秘密裡に存在した交易関係の性格を理解することが大事になる。それはスケールの大きな密貿易(抜荷)のことだ。この交易は、葉種取引に隠れて清朝の望む蝦夷地の干し昆布を鹿兒島へ大量に提供する大胆な商い取引であり、薩摩藩に附庸する琉球王国を介した中国本土と日本の薩摩藩、ひいては富山藩・葉種業者のウィン・ウィン関係によって維持されたのである。こうして弥一ら富

山の売薬人は、干し昆布を大量に提供する代わりに、通常取引では入手しがたい珍品の唐薬種を幕府に隠れて購入できたのだ。富山の薬売りの間では薩摩組と呼ばれる鹿兒島担当の弥一らは、鎖国令による禁制を犯しながら、薩摩藩の抜荷を支える共犯者にして受益者となったのである。

さて、小説『潮音』を支える文学の様式と構成に戻ってみたい。第一の流れは、宮本氏流に言えば、どれほど富山の薬種業の歴史や沿革を事実として踏まえていても、また登場人物に有力なモデルがいたにせよ、著者が弥一らに自由な会話や発言を許している限り、基本的には虚構としての「時代小説」に近づいている。

他方、『潮音』の片方では、第二の流れとして、歴史に実在した人物がふんだんに登場する。孝明天皇や徳川慶喜から島津久光や山内容堂に至る政治エリートの最高層だけでなく、「さいだいしよう」と称される薩摩の三傑らのエリート中間層、坂本龍馬らの勤王倒幕志士や新選組の近藤勇らの佐幕浪士・幕府直参剣士たちにはかならない。かれらが頻りに登場するのは、幕末の尊王攘夷や勤王倒幕などの政治運動のダイナミックスを小説で描くためである。しかし、この部分では著者があくまでも「歴史小説」への厳密な禁欲を堅持している限り、「さいだいしよう」らを沈黙させ、書状や遊説でのびのびと自己主張させることはない。そのために叙述はいつも控えめであり、意気揚々とした活気にも乏しいのである。

すべては、語り手としての弥一が、西郷たちが語った内容

吉田松陰の非現実的主張に長州の藩論が引つ張られる傾向に、薬種問屋や薬売りの皮膚感覚で身についた合理主義から静かに疑問を投げかけるのも厭わない。

しかし『潮音』では、井伊や松陰らがそれぞれの立場から激昂したり悲憤慷慨する光景はまったく出てこない。西郷・大久保・小松らによる京都藩邸の倒幕謀議は、本来なら文学として大いに想像力をかきたてる素材になるが、その種のシーンには再現されないのである。こうした点は、実在しているか、あるいは実在した人物を描くことを目的にする文学は、自分のたずさわる文学の創作とは何の共通点もないというトルストイに通じるものがある。

さて、『潮音』の弥一は、風土や気候の違いに弱音を吐かず、行く先々の人びとと摩擦も起こさない。あらぬ疑惑をかけられては仕事も叶わぬ富山の薬売りにふさわしく、剛毅沈着かつ英邁闊達な人物なのである。他方、薩摩の三傑は、幕末の急激な政治変動を企て、世を煽動し、想像を超えた大風波をもたらし、宮本氏は、島津久光の命をないがしろにして動いた西郷・大久保が追い詰められて仕方なく打った大博打こそ武力倒幕ではないかと、私もかなり同意できる歴史解釈を試みている。久光にしても、私がかつて『嫉妬の世界史』（新潮新書）で指摘したように、西郷への嫉妬心にとらわれていた。そして、氏が同じ人間として避けられない妬みに焦点を置いて久光を描いているのも納得できた。

列強の馬関砲撃、薩英戦争、池田屋事件、禁門の変から鳥羽伏見の戦い、そして西南戦争にいたるまで、この作品は多

を御製薬掛目付の園田矢之助からの知らせで、伝聞や噂として得た知識が遠慮がちに語られるにすぎない。おそらく実在したとは思えぬ園田は、藩の役向きの士分という設定だから、ぎりぎり家老の小松帯刀ひよつとして君侯の島津久光から命を受けるか、時に会話できる身分だったかもしれない。しかし、この地味な園田こそ『潮音』では、「時代小説」と「歴史小説」をつなぐ「新しい歴史小説」の蝶つがいにもふさわしい人物なのである。

こうして著者は、「俺には無理だ」と編集者から逃げ回った歴史小説の執筆を大佛次郎の『天皇の世紀』や辻邦生の『晋教者ユリアヌス』とも違う形で実現したのである。それは、『潮音』を無理に歴史小説の伝統的手法にあてはめない新たなスタイルで成功させたといえよう。また氏は、西郷や龍馬や慶喜らが自由奔放に虚構を大いに交えながら語り尽した司馬遼太郎の道も選ばなかったのである。それどころか、歴史家あるいは歴史学者の私から見ても、無理のない慎重な事実解釈に留まるかと思えば、時に歴史家が避けてきた論争のテーマにも割って入り、富山の薬売りの口を借りながら、「歴史小説」の部分では大胆かつ斬新な歴史解釈も試みている。たとえば、著者は、開国貿易の道をあえて決断した井伊直弼こそ理にかなっており、条約制許問題でいたずらに日本を混乱させた孝明天皇や尊王攘夷派公卿・志士たちに厳しい疑問を投げかけることにも躊躇しない。また、長州藩の長井雅楽による航海遠略策こそ時世に適った無理のない提言と評価する。その一方、国力を顧みずいたずらに攘夷を呼号した

くの事変や内戦を描いている。しかし、その描き方は歴史家のように戦史や外交文書などの各種史料に依拠した年代記というわけではない。むしろ、ほぼすべてが弥一の史眼で濾過された文学的記述なのである。

たとえば、弥一は、圧倒的な兵力を誇る幕府軍に弱小の薩長軍が歯向かえるはずがないと考える。この弥一（実は宮本氏）の理性的な洞察力から考えるなら、起こるはずのない戦が始まった。この不思議さに当惑する各人の感情が多面的に描かれる。それと同時に、幕薩の力関係の差を冷静に認識しながらも、あえて倒幕開戦に踏み切る西郷や大久保の生死を賭けた大胆な決心は、戦が兵を互いに殺しあい、世間に争いの不道徳を印象付ける悪だという真実を知らなかったせいではない。二人あるいは小松を含めた「さいだいしよう」にとって、そうすることが死活の選択であり、挑戦しなければ幕府ひいては薩摩藩内の門閥保守派の手で抹殺されかねなかったという宮本氏の解釈と叙述は冴えている。

これはさながらナポレオンとロシアのアレクサンドル一世による互いの生存を賭けた戦が必然だった点ともよく似ている。鳥羽伏見の戦いの死活の側面を作品中でいちばんよく理解しているのも弥一であり、薄暗がりのなかに次第に浮かび上がってくる「さいだいしよう」の緊迫した政治シムレットや、西郷・大久保と一線を画した小松の特異性なども、伝聞による彼らの発言を幾重にも確認することで、読者も理解できる仕掛けが丁寧凝らされている。薩摩と幕府との軍事対決は理性的に考えると起きようもなかった。それでも、現実

に起きた原因や背景については、トルストイの表現にほぼ尽きていように思える。

「人間たちはミツバチが秋になる頃おたがい殺し合い、動物の雄たちがおたがい殺し合う、あの自然の、動物学的法則を実現していたからである」(藤沼貞訳)。

鳥羽伏見の戦いから戊辰戦争、そして西南戦争の原因や本質について文学的に触れるなら、トルストイの説明では十分なのであろう。歴史家と違って作戦の変化や部隊の配置や命令の伝達に事細かに触れる必要はないからだ。宮本氏が戦いの細部にこだわらないのは、氏が独自に考えた歴史小説への見方からすれば格別に異とするにあたらない。

ただ残念なのは、『潮音』には著者が参照した富山の薬種業の史料や薬学文献が紹介されていないことだ。薩摩藩側の史料や文献も提示されていない。『玉里島津家史料』『忠義公史料』『旧記雑録』はもとより日本史籍協会叢書(正統)などに接したのか否かは、将来この大河作品を研究する文学研究者や文藝評論家も知りたがるであろう。氏が参看した富山薬種業史の各種文献などは、私を含めて『潮音』の愛読者もきつと知りたいはずである。また、氏による幕薩関係や人間群像の解釈などは、幕末維新史の成果を踏まえていると思われるが、その説明も見当たらない。氏の扱った領域は、近年では家近良樹・岩下哲典・町田明広・久住真也・藤田英昭氏はじめ多くの優れた研究者による成果が出されている。しかし、氏の分析が独自のものだとするれば、それは驚嘆に値する

のではないか。

著者は、虚構の度合いが少ない「歴史小説」と、極端に言えば藩名や官名も虚構であってもよい「時代小説」の要素を独特な手法で接近させた。「歴史小説」の部分に間々混入する読みの間違いや勘違いの例について、二点だけ指摘しておきたい。作品中では、島津久光をどこでも「藩父」としているが、これは史実として「国父」の敬称でよいのではないかと、また、寺田屋事件で薩摩藩激派の有馬新七らの鎮撫に出かけた同藩士の一人、江夏仲左衛門の読みにはルビをふっていないが、すこし前の箇所では「江夏」と読んでいる。この藩士は正しくは「こうか」と読むべきであろう。

もつとも、これらは作者のミスなのか、誰の責任なのか分らない。以下、やや余談になる。私が少し前に出した『將軍の世紀』(上下、文藝春秋)でも、久光実子の藩主・島津久次に「しげひさ」とルビを振られたのには閉口したものだ。もちろん「もちひさ」が正しい。又次郎忠徳は、將軍・家茂の偏諱をもらい茂久に改名したのである。最終校が私の手を離れた後、刊行された本では私が関知しないところで何故か「しげひさ」になっていた。私でさえ犯すはずのない基礎的過ちである。他方、文藝春秋の編集者と校正者はすこぶる優秀なので、本来ならありえない不思議なエラーが何かの拍子で起きたのだろう。宮本氏の大河作品でもこの種のミスがあったとしても、それは「新たな歴史小説」に挑戦した意欲の誤差の範囲内ということにすぎない。